

この一年



祖母の笑顔思い出して

小田悦子さん (福岡・農業 三十七歳)

祖母が他界してもうすぐ一年が過ぎます。祖母は他界する前、ベッドに寝込み、私にだれであるかさえも分からなくなっていました。寝ている祖母の顔をなでていたら、ありがたう、ありがたうと何度も言いながら、顔をくしゃくしゃにして笑っていました。

その笑顔を見ていたら、それと同じような笑い顔を三十年くらい前に見たことを思い出しました。それは、親戚の家に手伝



高齢化社会に向かつて

日曜日に検診日を

佐野英子さん (道徳会社員 二十六歳)

医学の進歩で日本は世界一の長寿国です。これからますます高齢化が進むと思われるので、若いときから自分の健康は自分で守るといふ考えを持ち、市の各種の健康診断も、めんどうがらずに受診したいものです。

今年も胃がん検診の検診日が日曜日にもあり、非常に好評だったようです。基本健康診断や、子宮がん検診も、日曜日に検診

市民談話室



日を一泊していただければ、受診率も上がると思います。また、お年寄りも家の人と一緒に自動車で行けるので、是非ご配慮をお願いいたします。また、成人病やストレスに対する予防、お年寄りや慢性の病人の家庭看護方法や食事療法など、その場で困らないように、私たちが知識を深められるような講座が開かれれば、と願っています。各地区に呼びかけ、日曜日や夜の巡回講座などが開かれれば、より多くの人が参加できると思います。



カルチャーセンター

着工に思う

牧野 実さん (中塚協会社員 五十五歳)

わが町、白根市にも待望のカルチャーセンターが建設されることになりました。これも市史の一ページとなるべく、滝沢市政の一大イベントとして記されることだと思えます。市民が待ちに待った朗報です。

ただ一つ、一市民として老衰心ながら思うことは維持管理費の問題です。全市民の文化とスポーツの殿堂が宝の持ち腐れにならないよう、いま流に言われている第三セクター方式で運営されればと、一市民が愚かな発



作品「春の朱鷺」の寄贈に対し、十二月十日、市ほう賞規則に基づいて感謝状を贈呈しました

で迎えてくれました。それと同じ笑顔でした。

私は祖母とひいおばあさんの笑い顔をいつまでも忘れることはないでしょう。この一年は祖母やひいおばあさんの笑い顔とともに、昔のことをいちばん多く思い出した一年だったように思います。

車を一日つけていただければ、受診率も上がると思います。また、お年寄りも家の人と一緒に自動車で行けるので、是非ご配慮をお願いいたします。また、成人病やストレスに対する予防、お年寄りや慢性の病人の家庭看護方法や食事療法など、その場で困らないように、私たちが知識を深められるような講座が開かれれば、と願っています。各地区に呼びかけ、日曜日や夜の巡回講座などが開かれれば、より多くの人が参加できると思います。

皆さんのお便りを

お待ちしています

市民談話室のコーナーでは、皆さんの声を募集しています。気軽に投稿してください。

「夢」友を語る

「市政に望む」

373・2111(333)です。

市民文芸

川柳

般若経書く心境にさせた老い 佐藤トミノ
巳の春を絵馬にまかせて蛇眠り 高橋祐四雄
友情が今年も届く年賀状 田中 成子
年金の暮らしに見栄は切り捨てる 田村 恒夫
控えめに笑う今年の福寿草 中村 尚治
みどり児の指の力に明日がある 西条 ムラ
呼び声に引かれて買った福袋 早川 英男

俳句

黄昏で重なる月に秋の風 渡辺 勤
落ち葉掃く赤いはかまのみこ二三 玉木 長吉

短歌

閑と静両津の湾に点々と 中村 京
いか釣る舟とう漁火の見ゆ 元日迎え柏手を打つ 長谷川久二



私は今まで、あまり目を通したことがなかったのですが、母や祖母などは、毎月楽しみにしているようです。私も読んでみると、身近な人たちのことや、イベント情報などもあり、楽しませてくれました。(中央通・Kさん・24歳)

これからも、身近な話題や、たくさんさんの情報を盛り込んだ、だから親しまれる広報紙づくりを目指したいと思えます。情報や話題が多いことは、それだけ「まち」が生き生きと活動している証拠。気軽に「情報センター333」へ電話してください。皆さんからの話題提供をお待ちしています。

いつも広報しるねを拝見しておりますが、あまりにも「良い子」的なことばかりのように思えます。もう少し、生の声を取り上げてほしいでしょうか。(左工門小路・Mさん・56歳)

思い出の大日如来像

一生懸命写すんですよ。長井亮之さんは明治三十六年のお生まれで四の町の出身。厳しかったお父さんの思い出を話していただきました。「絵かきになりたいと言った

長井亮之さん

で寝てまして、見舞いに実家に戻ったときのことなんです。父はたいへん信心深い人で「俺の守り本尊をかいてくれ」と言うんです。それで、枕もとで守り本尊の大日如来像をかいたんです。父はそれで「楽になつたようだ」と喜んでくれました。今でもその絵は実家にあると思いますよ。現在も年に大作三枚を仕上げるといふ仕事のペースは変わり

すいものです。その幣巻はよく承知しているつもりですが、やはり、まだまだ自覚と努力が足りないようです。市政の話題を取り上げるときは、できるだけ市民の皆さんの声を掲載したいと思っておりますが、「広報に載る」ということで、なかなか本音を出してもらえないということがあります。広報紙が「本音でまちづくりを語り合える場」として、市民の皆さんの根付いてくれたら、と願わずにはいられません。そんな願いを込めて、このコーナーを設けてみました。いたづらやからかいは困りますが、市政に対する素朴な疑問、ご意見など、お寄せください。

ません。「パネルに本がき用の紙をはったときが、いちばん楽しみですね。でも、かき進むにつれて、悩みや、迷いや、苦しみが出てくるんですよ。それでも絵はやめられない。出来上がった作品でも、自分で満足だと思ふものなんて一枚もありませんよ。絵かきなんてみんなそうなんじゃないですか」昨年十一月に画業六十年展を新潟市のデパートで開き、これからますます活躍が期待される長井さんです。(新潟市在住・八十五歳)